

自主シンポジウム13

アメリカの ECERS (保育環境評価スケール・幼児版) にみる 保育の質と評価

話題提供者 渡辺のゆり(こひつじ保育園)
マーシー・ロバートソン (アメリカ・コロラド大学・人材開発センター)
埋橋 (うずはし) 玲子 (神戸女子大学)
指定討論者 金田利子 (静岡大学)
企画・司会者 埋橋玲子

I. 企画趣旨

乳幼児期のケアと教育、すなわち保育の質的向上は世界的な課題となっている。日本においても保育の第三者評価が実施の途につき、保育の質とは何か、保育の質の向上について何をなすべきか、自己評価はどうあるべきかについての関心が高まっている。

そこで、アメリカで開発され、現在保育の質の評価のツールとして複数の国で使用されている ECERS (読み; エカース、『保育環境評価スケール・幼児版』) に注目した。

当シンポジウムではまず ECERS の特徴・アメリカでの使用状況とスケールに対する評価の一端を示す。次いで ECERS が依拠する保育の質の定義とは異なる見解を示すものとして EC 保育ネットワークの見解等を紹介する。また保育現場の立場からの見解も示す。

以上の話題提供により ECERS のわが国の保育現場での使用を提案するとともに、「保育の質」について複数の視点から検討を行いたい。

<注釈>

* ECERS とは Early Childhood Environment Rating Scale の省略であり、原題を直訳すると「幼児期環境測定尺度」となり、2歳半から5歳までの幼児の集団保育の質を測定するために設計された、研究や保育の質的向上のためのツールである。全部で7個の大項目、43個の中項目、さらに各中項目の下位に測定のための小項目が置かれた構成となっており、スコアリングにより大項目・中項目ごとに1-7までの段階的評価ができる。評価は、保育の直接観察による。

* アメリカのノースカロライナ (チャペルヒル) 大学、フランク・ポーター・グラム (=FPG) 子ども発達研究所のテルマ・ハームス博士とリチャード・クリフォード博士によって初版が1980年に発行され、1998年に著者にデビィ・クレア博士を加え、改訂版が発行された。現在アメリカ国内で広く用いられるだけでなく、ヨーロッパやアジアにおいても保育の質の評価に用いられている。

評価スケールは全部で4種類あり、<幼児版>に続いて<家庭の保育版> (ハームス、クリフォード、1989)、<乳児版> (ハームス、クレア、クリフォード、1990)、学童保育版 (ハームス、ヤコブ、ホワイト、1996) が世に出た。幼児版は1998年に改訂され (ハームス、クリフォード、クレア)、乳児版は2003年に

改訂された。現在、家庭の保育版と学童版も改訂中である。

II. 話題提供

1. マーシー・ロバートソン; アメリカでの ECERS の使用

* 詳細資料は当日配布

①アメリカ・コロラド州のチャイルドケア概観

②コロラド州における ECERS の利用

- ・保育者の自己評価
- ・園長による保育の改善
- ・保育プログラムの評価、情報開示
- ・NPO<エデュケア>による質的評価
- ・チャイルドケア強化先行プロジェクト

[理由]総合的なアプローチであること、結果が得点で示されること、大規模研究で使われた実績など。

[結果]保育プログラムの全体的な質的向上、乳幼児期への関心・論議の高まり、保育環境と観察者の信頼性の標準化。

③ECERS の利点と考えるべき点

[利点]

- ・広範囲で使用されている実績。
- ・最小の労力でプログラムの全体像が示される。
- ・比較的使用が容易。
- ・改善のための手立てが示されている。
- ・小項目の用語が一般的な表現であるので多様な保育現場に合わせて、ある程度解釈と適用に柔軟性を持たせることができる。等々。

[考えるべき点]

- ・「テスト」に伴う問題点; 外部者の観察、意味と価値の理解不足のままの実行、等。
- ・信頼性のシステム。

④他の評価方法との比較

- ・NAEYC (全米乳幼児教育協会) の振興計画の認証を受ける準備に用いると便利。
- ・コロラドでは他の質測定のツールと併用されている。

⑤結論

ECERS は広く受け入れられ、幼児期の教育の全般的な質を測定するのに有益で世界的なツールであるとみなされている。保育の質の向上のために、個別的にも、大きな規模でも用いることができる。他の測定法、特に相互関係や言語、学習機会についてより細かく測

定できるものを用いると、とてもよいとも考えられる。かなり使いやすいツールであるが、観察者間での信頼性の確立が課題である。

2. 埋橋玲子：「保育の質」の多角的検討

*詳細資料は当日配布

ECERSの原著者であるテルマ・ハームスは、日本語版に寄せた序文の中で「・・・それぞれの国には独自の文化と慣習があるにせよ、現代の国々が発達させたい子どもの有能性には一連の核となるものがあるようだ。これらの有能性は私たち全員を結びつけるような世界的な文化の中で子どもたちが生きていくために必要とされるものと思われる」と述べている。同じく著者の一人であるデビィ・クレアは、保育の質には構造的な質と機能的な質があり、ECERSは機能的な質を評価するものであること、そして細部においては相違があるとしても、子どもが首尾よく発達を遂げるためにはどのような環境におかれているとしても、環境からのある種の基本的な働きかけが求められる、とする。ECERSは、子どもが必要とする基本的な条件には文化や社会を超えた共通性があり、測定可能であるとする考え方に基づいている。

これに対し、EC保育ネットワーク（1986-1996）では「質とは価値と信念に基づいた相対的な概念であり、質を定義することは力動的・連続的・民主的な過程である。ある共通の目標を設定してすべてのサービスに適用することと、個別のサービスに多様性を認めることのバランスが求められる」とする。ピーター・モスは複数の「利益関与者」の存在を強調している。

「保育」にはさまざまな「利益関与者」が存在するが、ECERSは子どもという利益関与者に焦点を当てたスケールであると考えられることができるだろう。

3. 渡辺のゆり：保育現場から

大阪・堺市にある保育園で、キリスト教の精神に基づき、保育を行っています。日々「なんとかしなくては」「このままではいけないんだけど」となかなか片付かない問題を抱えながら、あるいは差し迫った問題の解決のために「どうしたらいいんだろう」「とにかくやってみよう」というようなことの連続です。急場をしのぐために苦し紛れにやったことが案外子どもたちに良い形となって表れ、その後通常の保育形態として取り入れたというような例がたくさんあります。

いろいろなことがあるのが世の中ですし、子どもたちはそんな世の中に出ていかなくてはなりません。また一面的な見方では捉えきれないものを子どもたちはもっています。たとえば割れるものを持たせると、子どもは、まず、割りません。危険なものから遠ざけたつもりが、かえって子どもを危険にさらしてしまうこともあります。「安全」というひとつの項目をとっても、当面の危険回避が子どもの育ちを見通しての判断とな

るかどうかは慎重に判断をしたいところです。

30年余り前より保育にいろいろな形でかかわっていますが、以前のことを思い出すと子どもに懺悔をしたくなるようなことがたくさんあります。しかしそんな中で保育として大切な理念とは何か、そして理念を言葉だけでなくどう実践の中で生かしていくべきかを考え続けてきました。たとえば「家庭的」であろうとしたとき、「家庭」とは何か、子どもどうし、子どもと先生、先生と保護者、環境構成、それらをひっくるめて考えます。その中でいろんなことが起きるのですが、「子どもを人としてみる」感覚を大切に、多少の不都合はやむをえないとしても、子どもの心と身体に一生残す傷だけはつけまいと固く誓っております。そのためには外部の方からも意見を聞いて、自分たちのあり方を問い直すことを怠ってはならないと思います。昨年私たちが第三者評価を受けたのも、そのような気持ちからでした。

私の園には180人余りの子どもがおり、職員は35人おります。個性も考え方もいろいろです。また職員は家庭と仕事を両立させなくてはなりません。保護者の方にもそれなりの意見があります。制度的なことでは「そんなこというならお役所の人、3日でもいいから私たちと一緒にやってみてください」といいたいくなります。そんなこんな全部ひっくるめたものが現実の保育であり、保育園というものであり、それを踏まえての「評価」であると思います。

Ⅲ. 指定討論—金田利子

*本研究は科学研究補助金を得て執行されました<課題番号14510239>。

参考文献

- Andersson, M. 1999 *The Early Childhood Environment Rating Scale (ECERS) as a Tool in Evaluating and Improving Quality in Preschools*, Stockholm Institute of Education Press.
- Bredenkamp, S. & Copple, C. ed. 1997 *Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Programs*, NAEYC (邦訳：白川蓉子・小田豊監修『乳幼児の発達にふさわしい教育実践』2000、東洋館出版社)
- Cryer, D., Defining and Assessing Early Childhood Program Quality, *ANNALS, AAPSS*, 563. 1999.
- EC保育ネットワーク 1996 *A Review of Services for Young Children in the European Union 1990-1995*.
- EC保育ネットワーク 1996 *Quality Targets in Services for Young Children*.
- Harmes, T. 他 1998 *Early Childhood Environment Rating Scale-Revised Edition* (邦訳：埋橋玲子訳『保育環境評価スケール・幼児版』2004 法律文化社)
- Moss, P. 1994. Defining Quality: Values, Stakeholders and Processes, *Valuing Quality in Early Childhood Services*, Paul Champman.
- OECD 2001 *Starting Strong: Early Childhood Education and Care*.